# すみだ地域学情報 We!

第28号
2014年
（平成26年）
4月発行

発行：墨田区教育委員会（生涯学習課）
〒130-8640 墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎ 03-5608-6309 FAX 03-5608-6411 ✉ syougaigakus@city.sumida.lg.jp

ふれあい 活力 ゆとり
すみだ

すみだ やさしいまち宣言・人と地域と環境のために


# 桜の名所向島

明治３０年頃の墨堤（小川一真撮影）緑図書館提供

幕末に日本を訪れたスコットランド出身の植物学者ロバート・フォーチュンは著書『幕末日本探訪記―江戸と北京』で「木の橋を渡って、日本語で向島、すなわち「江戸の対岸の島」と呼ばれている土地に入った・・（略）・・やがてほとんど家のない田舎にでた。振り返って対岸を望めば江戸の街が、その寺院、望楼、そして樹々の繁った起伏する丘陵が、眼前に展開して、得もいわれぬ美しい絵になっていた。ほとんど私たちのいる土地全体が一つの広い庭園だった。」と書いていて、その風景美に心をうばわれた様子がわかります。

このように向島は、江戸の頃より近郊行楽の景勝地として名のあったところで、わけても花見といえば向島が江戸第一といわれました（『江戸花暦』）。隅田川に沿う堤は、古くは葛西の陂（つつみ）、一般には隅田堤あるいは墨堤と呼ばれ、文人墨客の好むところでした。亀田鵬斎（ほうさい）の「長堤十里白にして痕なし」で始まる有名な漢詩「題隅田堤櫻花」の碑は木母寺境内にあります。墨田区民愛唱歌でもある、武島羽衣作詞、滝廉太郎作曲による「花」は、誰でも一度は口ずさんだ歌でしょう。

墨堤と桜の縁は、４代将軍家綱が常陸国（ひたちのくに）桜川から桜を移して木母寺近くの堤に植えたのが始めといわれます。木母寺は、謡曲「隅田川」の地であり、一方、桜川は謡曲「桜川」の舞台でもあります。満開の桜の下でめでたく母と出会うという「桜川」にちなんで、母子との再会を果たせなかった梅若の霊を慰めたのかも知れません。

墨堤に桜並木ができたのは、「隅田村名主坂田家書上」によれば、享保２年（１７１７）に将軍吉宗が橋場の渡し脇の上がり場より隅田川御殿まで桜を植え、さらに享保11年（１７２６）に桃、柳、桜を植え増し、名主坂田弥次右衛門にその育成を命じた時からといわれます（『新編武蔵風土記稿』では享保17年、「徳川実記」では享保10年）。墨堤には枝折禁止の高札が立っていましたが、幕府が崩壊すると枝を折る輩が出て桜が弱り、明治政府も直ちに枝折を禁止しています。

天明の大洪水の後の寛政元年（１７８９）、墨堤は隅田川の中州の土でかさ上げされ三囲の鳥居は土手に隠れてしまうのですが、植え替えられた桜の生育は以前にまして良くなったといいます。桜並木は文政11年（１８２８）の『墨水遊覧誌』を見ると白鬚神社の辺りまで描かれています。桜が木母寺から枕橋に至るのは明治13年（１８８０）のことです。三囲神社境内芭蕉庵の其角堂永機（きかくどうえいき）の呼びかけに応じたものでした。江戸より代々人々に守られ、育てられてきた墨堤の桜の歴史と由来は、明治20年建立の「墨堤植桜之碑」に刻まれ、今日も言問団子の店前の植え込みに建っています。

明治の後半には、これらの桜が墨堤を覆うように成長し、女性の髪がすれ違う人で崩れてしまうほど花見の人出は最盛期を迎えます。この頃には、枕橋から鐘ケ淵、さらに綾瀬川を渡って千住から江北村鹿浜へと凡そ15㎞にわたって花見を楽しむことができました。「花より団子」と言う向きもありますが、桜餅や言問団子の外にも墨堤に団子のあったことは、寺島生まれの幸田文が「花見団子」という随筆に、一串四ヶの花見団子を「素朴というか単純というか、正直な味だったとおもう。」と記していることからわかります。

また、向島は夜桜の名所ともいわれます。料亭から桜を眺め、あるいは、昼間の賑わいを嫌って風流人は月明かりの中で、夜桜を愛でるのを好しとしました。

震災後植え替えられた墨堤の桜は空襲による焼失を辛くものがれましたが、害虫や工場の煤煙、隅田川の汚染によるガスなどで弱り、健康な桜に植え替える必要がありました（『東京のさくら名所今昔』）。現在は、染井吉野の外にもさまざまな品種の桜がまるで桜の百科事典のように咲き競い、スカイツリーを桜越しに眺める景色も一興を添えています。

（墨田区文化財調査員　松島　茂）

# すみだの石仏

区内の石仏（庚申塔に刻まれた石仏を除く）には、地蔵像があります。地蔵信仰は平安後期に貴族間に深く根をおろしましたが、江戸期になると諸願成就の仏として、庶民の間にまで広く信仰されるようになりました。

お地蔵様、正しくは地蔵菩薩は、釈迦入滅後に未来仏としての弥勒菩薩がこの世に現われるまでの長い仏のない世にあって、六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）へ輪廻して苦しむ人々を救うために働く仏様だと考えられています。

この六道で活動する姿を象徴するのが、六体のお地蔵様が並ぶ六地蔵です。「正徳二年」（1712）銘で始まる多聞寺の坐像の六地蔵（写真）、阿弥陀仏を中心とした東漸寺（立花六丁目）の「元文元年」（1736）銘の立像の六地蔵、如意輪寺（吾妻橋一丁目）の石幢のように六角柱の各面に刻まれた六地蔵等、形式はさまざまですが、江戸の頃の人々の願いが深く込められています。

また、石仏に刻まれた銘文を読むことによって、その地蔵が造立された理由を読み取ることができます。

さて、お地蔵様は、さまざまな功徳を示すように、延命地蔵とか、子育地蔵、水子地蔵、とげぬき地蔵等と呼ばれて信仰されています。

例えば、東向島三丁目の子育地蔵（写真）は、文化年間に隅田川の堤防修築工事の際に、土中から発見されたと伝えられるもので、今でも四の日の縁日は賑わっています。

また、両国の回向院にある水子塚は、老中の松平定信が寛政5年（1793）に建てさせたと伝えられるもので、地蔵坐像が刻まれており、江戸時代に多かった堕胎や間引きで失われた幼い者達の魂を供養するためとか。お地蔵様は幼い者をお守りくださる仏像としても深く信仰されていたからでしょう。

墨田の石仏には、阿弥陀如来や観世音菩薩もあります。阿弥陀如来は、西方の極楽浄土にあって、すべての人々を救うと信じられている仏様です。

多聞寺の六地蔵

東向島三丁目の子育地蔵

墨田二丁目の正福寺にある「万治四年」（1661）銘の阿弥陀立像は、総高176cmあり、石仏の左右の銘文中に女性の名が多く見られ、後生を願う女性の気持ちがひしひしと感じられます。

押上二丁目の円通寺にも、「享保七年」（1722）銘の阿弥陀立像（写真）があります。高さ153cmと大柄ですが、銘文に「三界萬霊」と年月日があるだけなのは、はじめから寺の墓域に納めるつもりだったのかもしれません。

東墨田三丁目の萬福寺にある「元禄三年」（1690）銘の阿弥陀立像は大きくはありませんが、立体感のある石仏です。この萬福寺には、観音坐像の石仏もあり、「寛文十二年」（1672）銘が刻まれ、木下川村ともあることから、このあたりの観音講によって造立されたものでしょう。

多聞寺には、「明和八年」（1771）銘の観音立像もあります。かなり風化が進んでいるのが惜しまれますが、その反面、この石仏が建てられた頃のお姿があれこれと想像されて、興味深くもあります。

円通寺の阿弥陀立像

参考「社会教育だより」
墨田区教育委員会発行